

# 西大寺食堂院・ 右京北辺の調査

— 第404・410・415次

## 1 調査の概要

調査地は奈良市西大寺本町に所在し、平城京条坊では、右京一条三坊八坪・北辺三坊三坪にあたる。八坪は西大寺食堂院推定地にあたり、調査区のはほぼ中央に一条北大路、東接する県道付近に西三坊坊間東小路が推定されている。

本調査は、マンション建設にともなう事前調査で、南北約107m、東西59mのL字形の調査区を設定した(第404次・第410次)。その後、建設予定建物の設計変更にとともに、調査区の南に2箇所のトレンチを設定した(第415次)。調査期間は、第404次調査が2006年5月24日から8月30日まで、第410次調査が7月31日から10月16日まで、第415次調査が10月24日から31日まで、調査面積は合計1900㎡である。

## 2 調査区周辺の既往の調査

周辺でおこなわれた発掘調査の成果を概観する。

調査地に南接する道路南側では、食堂の東北部分とみられる大型柱穴7基、調査地の東では、南北方向に延びる埋甕列や凝灰岩列が検出されている。(市西大寺第12次・第15次、市教委1998・2006『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書』平成9年度(第2分冊)・平成15年度)。また、八坪西端部の掘込地業をともなう基壇建物は、門や回廊、僧坊などの可能性が指摘されている(第242-19次、『1993年平城概報』)。

一条北大路の遺構は、既往の調査で概ねその位置が特定されている(元興寺の3年調査、(財)元興寺文化財研究所2005『平城京右京北辺』など)。一方、右京北辺の条坊遺構は、北辺二坊二・三坪の坪境小路と思われる遺構を検出するのみで、既報告の奈良時代前半の建物遺構は、条坊との関連やその性格について検討の余地が残されている(第103-16次・第151-26次・市322次調査、『昭和52年平城概報』・奈文研1984『平城京右京一条北辺四坊六坪発掘調査報告』・市教委1996『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書』平成7年度)。

今回の調査では、西大寺食堂院の諸施設と一条北大路の確定、右京北辺にかかわる遺構の検出が期待された。



図176 第404・410・415次調査区位置図

## 3 基本層序

調査区は大小5つのトレンチに分かれる。それぞれ北区・中区・南区・南東区・東区と称する(図176)。

調査地は、北西から南東に向かう緩斜面に立地する。基本層序は、上から既存建物撤去にともなう土砂層、暗灰褐色土(旧耕作土)、茶褐色粘質砂(床土)となり、X = -144.650以北は、床土直下に橙褐色粘質土(遺構検出面)、青灰色粘土・明橙色粘土(地山)と続き、以南は、瓦器を含む茶褐色粘質土、10世紀の遺物を含む暗灰色土、奈良時代後半の整地層である褐灰色粘質土、奈良時代前半の遺構を検出した黄灰色粘質土、灰色砂質土(自然堆積土)となる(暗灰色土はSB960南東付近およびSD942周辺にのみ分布する)。東区は、浄化槽による攪乱土を取り除いた下の、橙褐色粘質土(自然堆積土)上面で遺構を検出した。

## 4 右京一条三坊八坪の遺構

検出した遺構は、右京一条三坊八坪、一条北大路、右京北辺三坊三坪に大別して報告する。

右京一条三坊八坪で検出した遺構は、奈良時代前半以前、奈良時代後半、平安時代以降に時期区分される。

### 奈良時代前半以前の遺構

遺構は、座標方位に対して北で東、東で南に振れる。SB959 桁行4間以上、梁行2間の掘立柱の南北棟建物。柱間は、桁行約2.4m(8尺)、梁行約2.7m(9尺)、柱穴は隅丸方形で、一辺は約90cm。

SX961・962 SX961は東西方向の掘立柱列。柱穴4基を検出。SX962は南北方向の掘立柱列で、SX961東端の柱穴より北1間分を検出した。両者とも柱間は約2.1m(7尺)、柱穴は隅丸方形もしくは円形で、直径約90cm。

SD963 SX961から約3.3m南で検出した東西溝。幅約1.1m、深さ約20cm。西は調査区の外に続く。

SB953 桁行1間以上、梁行1間の掘立柱の南北棟建物。柱間は梁行約2.4m(8尺)、桁行約1.8m(6尺)、2基の柱穴は礎盤石や根石を残す。柱穴はほぼ円形で、直径1.0~1.2m。北柱筋はSX961と、東柱筋はSB959の西柱筋とそろえる。

SX990 南北方向の掘立柱列。柱穴2基を検出した。柱間は約2.4m(8尺)、柱穴は隅丸方形で、一辺約80cm。北側の柱穴はSB959北妻柱筋の延長上に位置する。

#### 奈良時代後半(西大寺創建段階)の遺構

SB955 礎石据付穴(6基)を確認した。東西棟建物の北東部分とみられ、柱間は約3.0m(10尺)。全体の規模は、桁行方向はSB960より推定される中軸で折り返すと約30m(100尺)、梁行方向は柱間寸法より約12m(40尺)に復元され、「西大寺資財流記帳」(以下「資財帳」)にみえる「殿」に等しい。据付穴は方形で、一辺は約2.1m。東妻柱筋の据付穴のみ、東西方向の一辺が約1.5mと小さい。上面の削平が著しく、据付穴の深さは最大でも約30cmを残す程度である。

SB960・SD971・SD972 SB960は礎石建ちの東西棟建

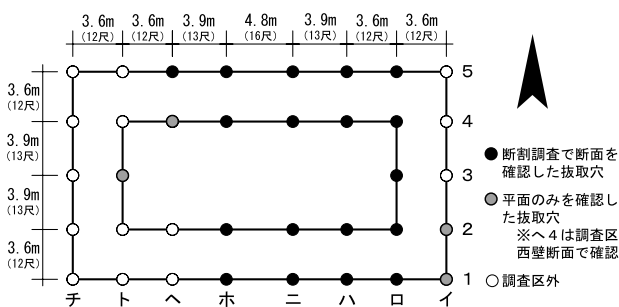


図177 SB960柱番付及び柱間寸法



図178 SB960礎石据付穴(ハ1)壺掘り地業(北西から)

物。基壇土、基壇南北縁、礎石の据付・抜取穴(22基)を確認した。桁行5間、梁行2間の身舎の四面に庇が付く建物と考えられる。全体の規模は、桁行方向約27m(90尺)、梁行方向約15m(50尺)と推定され、「資財帳」の「大炊殿」に比定される。

基壇規模は、東西約30m(推定)、南北約18m。基壇土は地山上に直接積む。明瞭な版築は認められない。南縁部にはSD971が、北縁部西半にはSD972が通る。基壇外装の抜取溝もしくは雨落溝を踏襲して掘られた溝か。南北両縁部ともに階段の痕跡は確認していない。

礎石据付穴は壺掘り地業を施し、一辺1.5~2mの隅丸方形を呈し、深さは0.5~0.7m。埋土は突き固められ、層状を呈するものもある。また、地業の中心部分には人頭大の石を埋め込み、瓦を面的に敷き込むものもある(図178)。

礎石抜取穴の遺物は、9世紀半ばを下限とする。SD972・SK973出土の遺物も同様であることから、SB960は、9世紀の半ば頃までに廃絶した可能性が高い。

SC965 SB955とSB960の中央間をつなぐ南北方向の軒廊。桁行3間、梁行1間の礎石建ちで、柱間は桁行約3m(10尺)、梁行約5.1m(17尺)。

SB970 SB960の北で検出した掘立柱の東西棟建物。桁行5間、梁行1間、柱穴10基を確認した。柱穴は一辺約1mの不整な方形で、深さは約60cm。柱穴の一部には直径約30cmの柱根が残存する。遺物は、奈良時代の土師器を主体とし、製塩土器を含む。建物位置から「資財帳」にみえる「甲双倉」の南西部分と推定されるが、「資財帳」と規模が合致しない。「資財帳」は柱位置ではなく、倉部分の内寸を表しているため。

SB975・SD979 中区南部で掘立柱の柱穴2基を確認した。柱間は約2.7m(9尺)。食堂院の北を区切る築地に開く。柱穴は一辺約1.2mの方形で、深さ約80cm。西側の柱穴は、掘形底部中央に半裁した小丸太を置き、約40cm土を積んだ上に凝灰岩の礎盤(一辺約40cmの方形で厚さ約10cm)を据える。掘形から奈良時代の土器が、抜取穴から9世紀半ばから10世紀前半までの土器が出土した。

また、SB975の南で北面築地の南雨落溝とみられるSD979を確認した。SB975の前面で幅が狭まる。

SE950 井籠組の井戸。井戸の平面は方形で、内法は一辺約2.3m。遺構検出面からの深さは約2.8m。井戸枠は

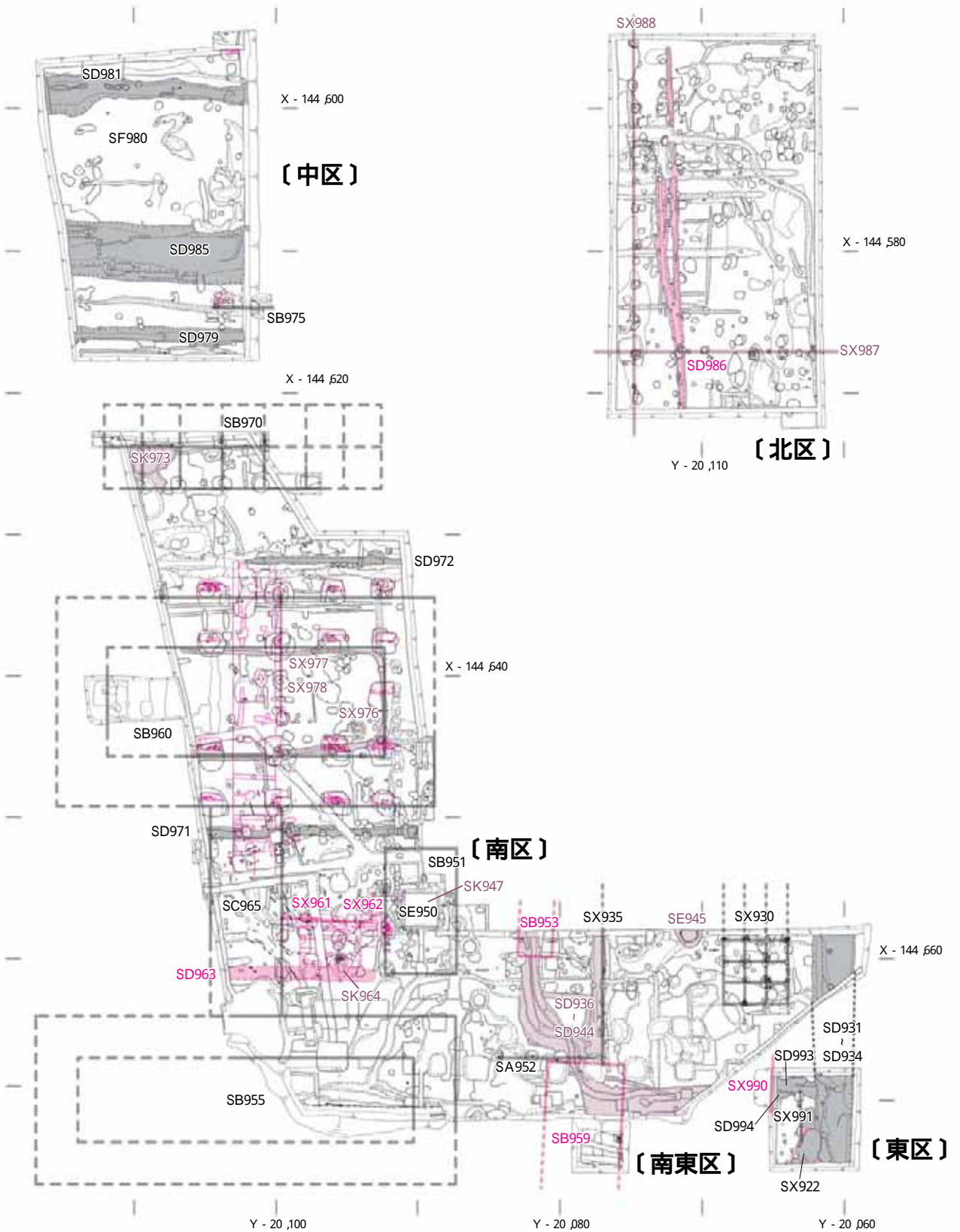


图179 第404・410・415次遺構平面图 1 : 400

横板材5段分(高さ約2.3m)が残存するが、井戸内部から井戸枠とみられる部材が出土しており、少なくとも6段以上存在したと考えられる。井戸底には、径3cm前後の円礫を敷き詰め、その上に木炭を敷く。

掘形は楕円形で、南北約5.4m、東西約6.6m。井戸本体は掘形の西寄りに設置されており、底部は井戸枠がおさまるほどの幅しかない。掘形の埋土は粘質土で、最上部は黄色土を層状に固め、丁寧に埋められている。また、黄色土上面には一部に凝灰岩が残存し、他にも石の抜取痕跡とみられる穴を確認していることから、井戸の周囲には石が据えられていた可能性がある。

井戸内の遺物は、上からa～eの5層に分けて取り上げた。e層は灰色粘質土で比較的遺物が少なく、d層は多量の遺物を含み、木屑層とともに互層をなす。c、b、a層と徐々に埋土のしまりが良くなり、木質遺物の量が減り土器の割合が増える。埋土の状況から、不要となったゴミを投棄することで、上部まで埋まったとみられる。投棄の開始から終了までの期間は、b～d層で珪藻類が検出されていることから、数週間程度であろう。

埋土から、「延暦十一年」の年紀をもつ木簡をはじめ、8世紀末を下限とする遺物が多量に出土した。SB951 桁行3間、梁行2間の南北棟掘立柱建物。柱間は桁行約3m(10尺)、梁行約2.6m(8.5尺)、SE950の覆屋と考えられる。SC965の梁行方向と柱筋をそろえ、規模も等しい。東柱筋はSB955の東妻柱筋にそろえる。柱穴の一部には、礎盤を残すものや、礎盤の下をさらに根石によって根固めしたものもある。

SX930 調査区東端で検出した埋甕列。各埋甕間は約1.5m(5尺)で、東西4基の列が、南北方向に4列並ぶ。埋甕は据付痕跡のみが残るものを含めて合計12基を確認

X - 144 654

X - 144 658

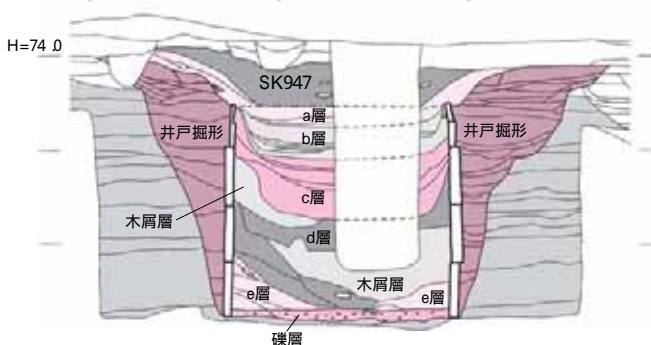


図180 SE950断面図 1:80

した。市15次調査で検出された埋甕遺構の南延長部分にあたる。未発掘部分にも遺構が連続していたとすると、埋甕列は市15次調査とあわせて南北約28.5mとなり、南北20列計80基の甕が並んでいたと推定される。

甕はほとんど原形をとどめておらず、底部のみが残存する。残存する掘形の直径は最大で約80cm。甕の下には、水平に据えるための径2～3cm大の小石などをかませる。甕の体部外面には、埋設を示すような変色などは確認できなかった。内部からは、10世紀代の土器が底部に貼り付いた状態で出土した。

なお、X = -144 665より南では、埋甕もしくは甕の断片などは確認されなかった。

SX935 SX930から約8m西で検出した、南北方向に断片的に並ぶ凝灰岩列。凝灰岩は風化が進んでいる。据え付けた形跡があるが、配列が乱れていることから、SD941の影響で原位置をとどめていないものと思われる。なお、X = -144 668より南では凝灰岩片が包含層においても出土していないため、南限はこの付近か。また、凝灰岩列より東は遺構面が若干高く、基壇状に整地された部分の西側外装とも考えられる。

SA952 SB955の身舎北柱筋より東にのびる掘立柱堀。柱穴4基を検出した。柱間は、東2間が約2.5m(8.5尺)、西1間が約2.1m(7尺)、東から1・3基目の穴には径20cmの柱根が残存する。最も西の柱穴は、瓦や拳大の丸石を敷いた上に凝灰岩の礎盤石を据えている。SD931～934・SX992 調査区の東辺を南流する南北溝。未発掘部分を含め南北約17m分を検出した。

SD931は溝幅約3m、深さは60cmが残存する。埋土は灰色粘質土で、埋土中に檜皮、瓦を多量に含む。SD931上面を整地した後、溝心を約1m西に移してSD932を造



図181 SX930検出状況(西から)

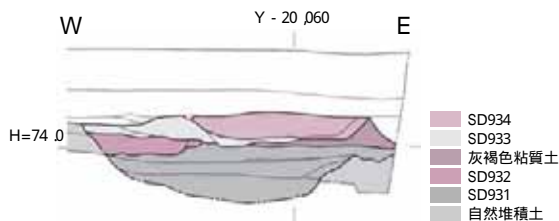


図182 SD931~934 断面図 1:160

り、さらに溝心を約30cm東に移動しSD933を、最後にSD934を造る。SD932は幅約1.2m、深さ約25cm。SD933は幅約2.6m、深さ約40cm、SD934は幅約2.5m、深さ約30cm。SX992はSD931に先行する溝のあふれ状遺構で、南で西に広がる。これらは、SX935を西辺とする基壇の東辺の溝か、食堂院東辺区画施設の西雨落溝を踏襲したものである。

SD993・994 東区で検出した東西溝。SD993はSD931に先行し、埋土は灰色砂質土。SD994は、SD993南肩に残る東西溝。攪乱により大部分が壊されている。

SX991 東区で検出した南北方向の掘立柱列。柱穴2基を検出した。柱間は約2.4m(8尺)。柱穴は隅丸方形で、一辺は約65cm。SX992に先行する。

#### 平安時代以降の遺構

SD936~944 南区南東部で、幾重にも重複する溝を検出した。これらの溝は、基本的に改修の痕跡を示すのみで、各遺構間に大きな時期差はなかったと考えられる。大雨などで氾濫した食堂院内の水を効率よく外に排水するために掘られたものであろう。重複関係でもっとも古いSD936の埋土から9世紀中頃の土器が出土した。

SK973 埋土は上層と下層に分かれる。上層は東西約3m以上、南北約2.5m以上。下層は一辺約2mの方形で、深さは最大で約40cm。埋土から奈良時代の瓦が出土した。上層は9世紀以降の土器を含む。SB960やSB970などの廃絶にともなう廃棄土坑か。

SX976・SD977 SX976は、東西約1.2m、南北約1mの赤白色を呈する焼土面。鍛錬鍛冶炉の底部と考えられる。2回の造り替えがあり、最新のもは直径70cm、残存深さ10cmの円形炉。SB960廃絶後に造られたものであろう。SD977はSX976にともなう周溝の可能性が高い。

SK947 SE950埋土上面で検出した南北2.3m、東西2.4mの方形の土坑。埋土からは多量の炭と9世紀後半から10世紀半ばまでの土器が出土した。SB960南東付近やSD942周辺に分布する暗灰色土に含まれる遺物と同時期で、10世紀半ばに大風で食堂が倒壊した後に、周辺一帯を整理した際の遺構であろう。

### 5 一条北大路の遺構

SF980・SD985 SD985は、一条北大路(SF980)の南側溝とみられる東西溝。東流し、溝幅3.5~4m、深さ約0.7

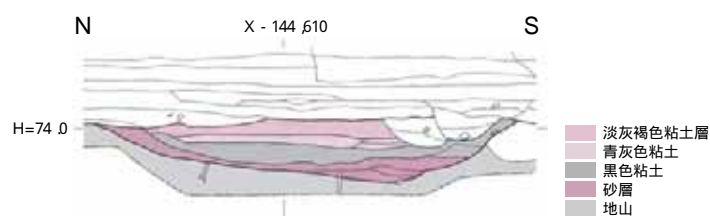


図183 SD985 断面図 1:160

m。側溝心の座標はおおよそX = -144.6105。少なくとも3回以上の浚渫・改修がおこなわれる。溝底付近に砂が堆積しており、比較的多量の水流があったとみられる。埋土から奈良時代後半の瓦が出土した。

北側溝は、中区・北区の間の現水路直下に存在する可能性が高い。その場合、一条北大路の側溝心々間距離は約16m(54尺・45大尺)と推定される。

SD981 幅1~1.5m、深さ約0.3mの東西溝。調査区東端付近で南に広がり、南流した痕跡も認められた。出土遺物は奈良時代後半のものを中心とする。

### 6 北辺三坊三坪の遺構

SD986 北区で検出した南北溝。ほぼ同じ場所で改修されている。幅・深さは一定でないが、幅は約30cm、遺構検出面からの深さは約10cm。埋土の様相から、一度に埋め立てられたと考えられる。奈良時代前半から中頃にかけての土器・瓦が多量に出土した。

SX987 東西方向の掘立柱列。柱穴は一辺60~80cmの隅丸方形で、深さは約30cm。柱間にばらつきが見られる。SX988と直交し、SD986を掘り込む。

SX988 南北方向の掘立柱列。柱穴は一辺60~80cm。南4基は柱間約2.6m、深さ約50cm。以北の柱穴は柱間や深さにばらつきがある。掘形から10世紀の黒色土器が出土した。  
(大林潤・馬場基・山本崇)

### 7 出土遺物

#### 木簡

SE950埋土各層から約360点(2007年1月末現在)出土した。その多くは木屑の間層を多量に含むc・d両層に集中し約8割を占める。今後水洗・選別の進行によって点数はさらに増加し、最終的には1000点を超えるものと予想される(以下、西大寺食堂院木簡と称する)。

西大寺食堂院木簡は、大別すると①食材の進上に関わる木簡、②食材の保管に関わる木簡、③食料ないし食材の支給に関わる木簡の3種類から構成されている。

1は園からの蔬菜の進上木簡。東園からは他に大根・知佐の進上木簡もある。2表・同裏・3表・4裏は飯支給の伝票木簡。記載は片面完結を原則とし、2の表裏は別途の支給。3裏は銭管理の帳簿、4表は朝参僧歴名に利用されている(これらが一次文書)。記載項目は、①支給

〔西大寺食堂院木簡釈文〕

1 東園進上瓜伍拾壹果 又木瓜拾丸 大豆十把 七月廿四日

2 飯壹升 伊賀栗拾使簡食料 八月廿七日 目代 (倉人カ)

3 飯貳升 客房侍倉人一人 鑑取一人 合二人 簡食料 (那カ) 三月五日

4 十日朝參深口頭一人 多守師 慈舞師 保忠師 別当守泰 飯壹升 雜 常料 十一月四日

5 羽郡野田郷戸主 私人戸口生江伊加万箇 延曆五年十月廿七日

6 少戸主波太郎直万呂大豆五斗 西大赤江南庄黒米五斗吉万箇 (延) 正曆十一年六月十五日吉万箇

7 西大赤江南庄黒米五斗吉万箇 (延) 正曆十一年六月十五日吉万箇

8 万呂黒米五斗西大寺 赤江北庄延曆十一年地子

9 美作国勝田郡吉野郷 米五斗 (搗カ)

10 西南 殿鑑 醬漬瓜六斗

11 醬漬瓜六斗 四斗六升

12 四斗六升

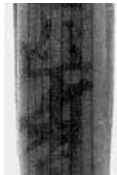
13 同法



5



7



8

年紀部分 (赤外線デジタル写真)

品目・数量、②被支給者・用途、③支給日付、④支給責任者、⑤決裁署名の5項目からなる。②は伊賀栗拾使(2表。「資財帳」に見える伊賀国名張郡所在の栗林に関わるか)、客房侍倉人・鑑取(3)のような雑務従事者のほか、雑 常料(4裏)のように用途の形で表現されるが、僧への支給例はない。⑤には上座、寺主、大・少都(維)那、可信が見え、寺主信如、大都那聞圓(3表)、少都那安豊、可信基懐が署す事例がある。

5は越前国足羽郡野田郷からの荷札。「羽郡」と省略する郡名表記から書き出す珍しい事例。品目は米か。6は大豆の荷札で、越前国との強い結びつきからみると、「少」は越前国足羽郡少名郷とみてよからう。同様の大豆の荷札は他に4点ある。7・8は「資財帳」に見える西大寺領荘園越前国坂井郡の赤江庄が貢進する地子の黒米の荷札。同庄が南北に分かれて経営されていたことを示す。書式も両庄で異なる。南庄・北庄とも同様の荷札がもう1点ずつあり、これらは実際に貢進された荘園の荷札として、また8世紀の荘園地子の具体例として貴重な事例。なお、7の年紀はこれまで「正曆」と釈読してきたが、明らかに「延曆」と読める5や8が見つかり、かつこれ以外の年紀はない。また共伴する土器も8世紀のうちに収まる。そこで、7も「延曆」を意図して書いたと考えるべきものと判断した。但し、「正」の第4・5画と延繞を共有する字形の「延」の事例は見出せない。9は美作国の春(搗)米の荷札。「資財帳」によれば、西大寺は美作国にも田地をもっていた。

10はキーホルダー木簡。11は醬漬の瓜の容器の付札。12は斗量のための付札。横材の帳簿状木簡を再加工したもので、食堂院内での米などの保管用付札か。4斗6升のほか、4斗8升、5斗1升、5斗1升3合、5斗1升4

合、5斗1升6合、5斗8升など類例が約15点ある。酒や塩の見える木簡もあるが、多量の製塩土器の出土に対して塩の荷札はない。塩の貢進形態に関わるか。13は曲物の墨書。墨書土器に「同法」「同」が多数ある。

最後に形態的な特徴として、削屑の割合が少ないこと、再加工を含め二次利用の痕跡を残す木簡が比較的多いこと、規格性に乏しく加工も比較的粗いことを挙げておく。

西大寺食堂院木簡は、極めて一括性の高い木簡群であり、食堂院の運営や事務処理だけでなく、寺院経営の実態や経済基盤を如実に示す豊かな内容をもつ。また、年代的にも8世紀末の平安遷都直前という、平城京跡ではこれまでに類を見ない時期のものである。内容的にも年代的にもユニークな木簡群として、今後の全貌の解明が期待される。(渡辺晃宏)

瓦磚類

食堂院地区からは奈良時代の瓦磚類が大量に出土した(表17)。ただし、SE950の出土遺物は整理中で今後も増加する可能性があり、表17の数値は暫定的である。

軒瓦の出土比率をみると、軒丸瓦6133R、6139A、6236Aなどが多い。これらは西大寺創建期の軒瓦である。このほかにも平安時代の西大寺84B、中世の西大寺164Aなどが出土している。

軒平瓦は奈良時代前半のものもあるが、6732F、6732Kなど6732型式を中心として6730Aなども少量出土している。図184は6733の新型式で、計5点出土している。文様は均整で左右3回反転の唐草文をかざり、中心飾りは上方に広がる無軸三葉形と対葉花文を組み合わせる。対葉花文上方の闊弁部の形が特徴である。瓦当面の向かって左上隅と左第3単位の主葉上辺に明確な範傷があり、顎は特異な曲線顎を呈す。瓦当最大幅は30.5cm。以上は奈

表17 第404・410・415次(6BSD)調査 出土瓦磚類集計表

軒丸瓦				軒平瓦			
型式	種	点数	型式	種	点数	型式	点数
6132	B	2	6641	C	1	平安	1
6133	R	11	6654	A	2	室町	1
	?	2	6663	A	1	型式不明(奈良)	16
6135	A	1	?	?	1	型式不明	41
	?	2	6664	D	1		
6139	A	16	6675	A	3	軒平瓦計	132
	?	2	6691	A	3		
6236	A	6		D	1	軒棧瓦	
	I	1		F	1	近世後半	1
	M	1	6710	D	2		
	?	14	6730	A	2	道具瓦	
	?	1	6732	E	1	鴟尾	1
古代		1		F	4	鬼瓦	3
西大寺164	A	1		K	6	面戸瓦	15
巴(中世)		1		N	1	製斗瓦	109
巴		1		Q	14	へら書瓦	1
西大寺84	B	1		R	3	隅切瓦	9
型式不明(奈良)		4		Z	3	刻印丸瓦	1
型式不明		19		?	14	刻印平瓦	8
			6733	新	5	道具瓦	6
			6767	A	1	平瓦(側面布目)	5
			6775	C	1	平瓦(雑)	2
			西大寺283	A	1		
軒丸瓦計		86	薬師寺321	1	道具瓦計		160
			丸瓦	平瓦	磚(レンガ含む)	凝灰岩(石含む)	
重量		883 4kg	3655 8kg	128 6kg	142 9kg		
点数		8130	40768	199	330		

丸・平・道具瓦については、404次1B70・1C70区の「井戸枠内」を除いた数値。

表18 第410次(6AGS)調査 出土瓦磚類集計表

軒丸瓦			軒平瓦		
型式	種	点数	型式	種	点数
6133	R	1	6685	B	2
6134	A	2	6691	A	1
6138	B	2	6702	?	1
6139	A	4	6732	Q	2
6200	A	1	?	?	1
6225	F	1	6733	新	1
6235	?	1	江戸		1
6236	A	4	型式不明		6
	H	1			
	I	1			
6304	?	1			
6308	?	1			
6314	A	1			
6316	M	1			
型式不明		11			
軒丸瓦計		33	軒平瓦計		15
	丸瓦	平瓦	磚	凝灰岩	
重量	402 3kg	1334 1kg	6 1kg	0 6kg	
点数	3388	14973	12	5	
	道具瓦				
	鬼瓦 1点	面戸瓦 4点	製斗瓦 10点		
	隅切平瓦 1点	刻印平瓦 1点			

良時代に属し、いずれも西大寺創建期の瓦である。このほか、平安時代の西大寺283A、薬師寺321などがある。

道具瓦では南都七大寺式鬼瓦 式B 1、平城宮式鬼瓦 式、鴟尾鱗部の残片、施釉の円形垂木先瓦や磚がある。施釉の磚は通常の方形磚に加え有段のものがある。釉色も緑色と褐色の2種が認められた。井戸SE950からは大量の製斗瓦とともに、凸面に「大男瓦二百九十七〔枚カ〕/又小女瓦」と墨書した丸瓦、人物像や鳥の戯画を描いた磚などが出土した。

食堂院の軒瓦は軒丸瓦6139A、6133R、6236Aと軒平瓦6732K、6732Qなどが主体をなし、6730Aや6733新形式も補足的に使用されたと考える。瓦の年代観から、食堂院の造営は概ね宝亀年間と考えられる。

北辺坊地区からも奈良時代に属する軒瓦が出土している(表18)。道具瓦では鬼瓦の小片があり、南都七大寺式Aの可能性が高い。また、食堂院地区と同様の施釉磚なども出土している。(今井晃樹・林正憲)



図184 6733新形式 1:4

## 土器・土製品

土器・土製品は調査区全体から整理箱で80箱ほど出土した。奈良時代の土器が全体的に多いが、包含層より出土する土器の傾向としては、南東よりに中近世のものと同様の傾向がある。

SE950出土土器 奈良時代末から長岡京期の須恵器、土師器とともに製塩土器が大量に出土した。須恵器、土師器は伴する木簡の年代とその一括性を評価すると、平城京土器Ⅵの基準資料となりうる可能性もあるが、寺院の資料である点や、器種構成および産地に偏りがあることから、平城宮、京の土器と同列に扱うことには注意を要する。また、特筆すべきは製塩土器の出土量で、整理箱で須恵器、土師器の約2倍にものぼる。京内の消費地から出土した古代の製塩土器としては他に例を見ない出土量として、今後の標識的な資料となろう。

出土した土器はおおむねa・b各層間と、c・d・e各層間で接合するものが多い。また、とくにc、d、e層にはほぼ完形に復する土器や墨書土器が多い傾向が指摘できる。製塩土器は各層で出土量に差異はないが、やはりc、d、e層に残存状況の良いものが多い。

土師器の主な器種は杯A、杯B、杯蓋、皿A、皿C、椀A、椀C、高杯、壺B、甕A。奈良時代を通じて普遍的な供膳具である杯Aは数点しかない。供膳具の主体を占めるのは椀と皿である。皿Aは法量から口径21cm前後の大型のものと口径16~18cm前後の小型の2種類があるが、小型の方が多い。甕Aは口径が約15cm、約23cm、約27cmの3種類あるが、主体は後二者である。

須恵器の種類は杯A、杯B、杯B蓋、皿A、皿C、鉢D、壺蓋、浄瓶、甕A。供膳具は杯Bが少なく、杯A、皿Aが多い。杯Bは少ないが杯B蓋が多い。転用硯の比率は少ない。また、杯Aと皿Aの多くは、灰~灰白色を呈する胎土や火摺の様子が特徴的で、特定の産地からの運ばれた可能性が高い。貯蔵具では鉢Dと甕Aが目立つ。とくに小型の貯蔵具としては鉢Dが主体的に使われていたであろう。法量違いが3種類、各2、3点ずつ出土した。

c・d・e層を中心に約100点の墨書土器も出土した。供膳具、とくに須恵器杯A、皿Aなどに「西大寺」あ



図185 SE950から出土した墨書土器

るいは「西寺」と墨書されたものが多く、約20点を数える(図185)。上述のように出土した供膳具は土師器皿A・椀Aと須恵器杯A・皿Aが多数を占めるが、「西大寺」「西寺」と記す供膳具は須恵器に偏る。また、注目すべきは「西大寺弥」や「薬〔師カ〕」と記したもので、これらは弥勒金堂、薬師金堂などへの配膳用の食器である可能性を想起させる。また、「綱」は僧侶の役職、「同法」「同」は本調査区の東側でおこなわれた最近の発掘調査でも同様の墨書土器が出土している。「同法」「同」は土師器皿Aの底部に記すものが多い。

製塩土器は筒形のものと同弾形のものに大別できる。布目を残す型づくりのものもあり、胎土と製作技法から数種類に分類できる。その他、圈足円面硯や緑釉椀、奈良二彩杯、盤、奈良三彩椀などの鉛釉陶器も出土した。SX930出土土器 SX930では須恵器甕の底部が据えられた状態で残るものもあった。原位置をとどめる底部の中には数個体分の破片が混じる。今回の調査でSX930および周辺の包含層から出土した甕は、頸部内径が40cm前後で、ほぼ同じ法量のものであるが、口縁端部の形状は3種類が認められ、埋甕に使われた甕は数種の産地のものを寄せ集めたと思われる。

据付掘形からは埋設時期を示すような土器は出土しなかったが、現存する底部の中から10世紀第2四半期頃とみられる土師器皿、黒色土器点数が出土した。これらの土器は別個体の甕片と混在するかたちで落ち込んでいたことから、ある程度、埋甕が割れた状態で混入したと思われる。(神野 恵)

## 木製品・金属製品

**木製品** 木製品の多くはSE950から出土した。食事具、服飾具、容器、祭祀具、部材など種類は多岐にわたるが点数は箸を除いて多くはない。これら製品以外に板ないし角材断片、削片、樹枝などがある。削片類は細長い細かなものが目立ち、建築部材等の大型品加工の際に生ずる大片は僅かである。細かな削片は例えば箸などの小型品製作にともなう可能性が高い。箸の点数が多いことはそれと関連し、失敗品などを含むと思われ、制作現場で削片とともに芥屑として一括され井戸廃棄時に遺棄されたものが多数あると思われる。一方、点数の少ない他の製品は芥屑として一括して遺棄されたものもあろうが、井戸使用時に誤って落下したのものも含むと考えられる。

食事具には杓子・匙・箸などがある。杓子には身の先縁を一直線に作るものと、先縁を半円形に作るものがある。全長が27cm以上の大型品や推定復元で全長16cm程度の小型品などがある。身の先縁は両面を使用するものと片面を主として使用するものとが認められる。樹種はスギが多くヒノキも認められる。箸は先端部をわずかに細く作るものが認められ、長さは21cm前後から25cm前後のものが多い。いずれも表面を粗く削り成形したもので、横断面が不整な七~八角形を呈する。樹種はヒノキとスギがある。匙は剝物で、適当な太さの木の枝を基部から取ったものを材としている。内面の半分ほどが黒色に炭化する。切り取った樹枝の基部を身に先端を柄に加工するもの。残存長14.9cm、残存高10.8cmあり、柄は身から急角度で立ち上がる。樹種はシイノキ属。SE950井戸枠内c層出土。

服飾具には下駄、横櫛などがあるが点数は少なく、下駄は1点のみで、横櫛は破片である。下駄は残存長18cm、幅8.6cm、残存高2.8cmの連歯下駄。歯幅は台の幅に揃う。歯は著しく摩耗し後歯は失われる。前壺は前歯の前中央、後壺は後歯の前に穿たれる。ヒノキの板目材を用いる。SE950井戸枠内d層出土。

容器には挽物皿と円形曲物がある。また、栓と考えられる小型の八角柱状製品がある。挽物皿は全周の1/5程度の小片でヒノキ材を横木取りしたもの。推定復元直径21cm、残存高1.4cm。SE950井戸枠内d木屑層出土。円形曲物には直径40cm程度の大型品や直径14cm程度の小型品がある。いずれも木釘結合。小型円形曲物底板の一面に



「同法」の墨書をもつものがある。SE950井戸枠内d層出土。祭祀具には斎串がある。中～小型品でC 型式。このほか用途不明ながら、上端部を4層の塔状に作った火箸状製品や5層の塔形あるいは相輪形の小型品などがある。部材には一端に柄を削りだし、その直下に柄孔を穿った脚部とみられるものが出土した。柄側と反対の小口面は使用により摩滅している。(小池伸彦)

SE950井戸枠 井戸枠は5段分合計20枚が残存するほか、e層直上から井戸枠とみられる部材が1点出土した。

下3段の材は長さ2,405～2,684mm、幅573～621mm、厚さ86～120mm。四隅の組手は5枚組。外面を鉾、内面および上下面を槍鉋で仕上げ、柄差部分と太柄穴部分は鑿で加工する。運搬用の棧穴を残すものもある。下から4段目は長さ2,577～2,685mm、幅255～265mm、厚さ65～108mm。四隅の組手は3枚組。北材は外面東寄りに「西南角

〔楼カ〕西大寺 名」の墨書をもつ。5段目は長さ2,570～2,650mm、幅235～284mm、厚さ61～89mm。上半分の劣化が著しいが、4段目と同じ形状に復元される。樹種はすべてヒノキで、年輪年代調査の結果、伐採時季は767年晩秋から768年早春にかけてと判断される。また、建築部材などからの転用痕跡は認められない。

下3段の外面には、線刻や打刻印が認められる。線刻は葉模様や直線などで、打刻印は「西」「寺」の文字を刻印したものと、の中に文字を入れる 字形とに分類される。字形は「大」「下」「十一」と刻み、「大」と「下」は線の太さから2種に分類される。上下段で打刻印の種類や数の関係は認められず、また、上2段には打刻印が確認されない。(大林)

金属製品 金属製品には銅火箸、鉄釘、鉄槍鉋、鉄刀子、鉄金具などがあるが、全体に数は少ない。鉄釘が比較的多いが他は少なく、特に銅製品は火箸のみである。金属製品は各種遺構や包含層から出土したが、特にSE950井戸枠内からが多く、溝、土坑、柱穴などからも少量出土した。銅火箸には3種類が認められ、①身部直径3.5mmで、「未敷蓮華」形に頭部を作り、その下に17条の螺旋状刻線を施すもの、②頭部を半球形に作り、身部直径3.8～4mmのもの、③身部直径3～3.3mmの細いものである。金具にはU字形を呈する釣瓶の吊下金具かと思われるものがある。(小池)

## 8 まとめ

右京一条三坊八坪では、大きく3つの時期の遺構を確認した。

奈良時代前半の遺構は、いずれも北で東に振れるという特徴を持つ。西大寺発願以前の当地の利用を考えるための資料となる。

今回の最大の成果は、「資財帳」の記載と等しい規模の遺構を検出し、奈良時代後半に造営された西大寺食堂院の位置と伽藍配置の大半が推定できるようになった。食堂院の造営は、出土瓦より宝亀年間(770～780)とみられ、「資財帳」が記された宝亀11年(780)までには完成していたことはほぼ間違いない。一方、食堂院の廃絶の時期については慎重な検討を要する。SB960礎石抜取穴より9世紀半ばの遺物が出土したと、SE950から出土した「延暦十一年」の木簡の存在より、殿や大炊殿などの食堂院の主要施設は、8世紀末から9世紀半ばまでに廃絶したと考えられるが、SX930の礎の底部から出土した遺物や、遺構検出面を覆う包含層から出土する遺物は10世紀半ばを下限とする。以上より、西大寺食堂院は、8世紀末から9世紀半ばまでのごく早い時期に、僧の共食の場としての本来の機能を失ったと考えられる。一方、貯蔵機能をもつSX930は、その後も存続した可能性があるが、10世紀半ばまでには廃絶したようである。また、食堂は応和2年(962)に大風により倒壊した(『日本紀略』)が、11世紀初めには弥勒金堂として機能していたとみえ(『七大寺日記』など)、後に再建されたい。SB960東辺からSX935南辺にかけて広がる包含層はこの時の整地土とみられる。しかし、他の建物は再建された様子はなく、排水用の溝や炉跡などを確認したのみである。

このほか、平城京の遺構として、一条北大路南側溝と、北辺の奈良時代前半の区画にともなう溝が特筆される。

遺物は、SE950を中心に多種多様な遺物が出土した。なかでも、木簡や施釉瓦磚・陶器、製塩土器などが注目される。SE950出土遺物は、現在も水洗・整理事業を継続しており、今後も重要な遺物の発見が期待される。

なお、本調査の詳細については、既に『西大寺食堂院・右京北辺発掘調査報告』を刊行している。合わせて参照されたい。(大林)